

主 論 文 要 旨

論文提出者氏名：清水 梨々花

専攻分野：神経精神科学

指導教授：古茶 大樹

主論文の題目：

Factors Influencing Self-Stigma in Bipolar Disorder:
A Survey of Japanese Outpatients

(双極性障害患者におけるセルフスティグマ要因の分析：日本人外来患者調査)

共著者：

Atsuo Nakagawa, Kumiko Ando, Hiroki Kocha

緒言

精神障害患者に関するスティグマは、現代社会における重要な課題の一つである。特にセルフスティグマは、精神障害患者の精神症状増悪やQOL低下、自殺リスク増大に繋がることが、過去の研究で示されている。セルフスティグマに関する研究は世界各国で進められているが、双極性障害患者に特化したものは少なく、特に日本では限定的である。本研究は、双極Ⅰ型障害または双極Ⅱ型障害と診断された日本人外来患者を対象に、セルフスティグマ強度に関連する人口統計学的・臨床的・社会的要因を明らかにすることを目的として実施した。

方法・対象

聖マリアンナ医科大学病院または聖マリアンナ医科大学横浜西部病院の神経精神科外来に通院中の双極性障害患者を対象に、横断調査を実施した。対象は、主治医が the Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition(DSM-5)に基づき双極性

障害と診断した 20 歳以上の患者で、診断後 3 ヶ月以上経過し、かつ調査時に臨床的に精神状態が安定していると判断された者とした。

人口統計学的要因として年齢、性別、初診時年齢、婚姻状況、罹病期間、入院回数、臨床的要因としてセルフスティグマ強度、スティグマ抵抗、双極性障害分類、社会的要因は雇用、経済的支援、診断開示状況を評価項目とした。セルフスティグマの測定には、the Japanese Version of the Self-Stigma of Mental Illness Scale (JSSMIS) と the Brief Version of the Internalized Stigma of Mental Illness Scale (ISMI-10) の 2 つの尺度を用いた。スティグマ抵抗の強さは、ISMI-10 のサブスコアを用いて評価した。

JSSMIS 合計点の中央値を基準として、対象者を高セルフスティグマ群と低セルフスティグマ群の二群に分け、t 検定とカイ二乗検定を用いて両群の特性を比較した。さらに、単変量解析で有意であった因子を独立変数として多変量ロジスティック回帰分析を行い、セルフスティグマ強度との関連を検討した。統計解析には JMP Pro 16.2.0 を使用した。

なお本研究は、聖マリアンナ医科大学生命倫理委員会(承認 6027 号)の承認を得たものである。

結果

対象者選定プロセスでは、171 名の候補者から 127 名が解析対象となり、有効率は 74.3%であった。参加者の平均年齢は 54.2 歳で、約 60%が女性であった。双極 I 型障害の診断を受けているのは 33.9% (43 名)、残りの 66.1% (84 名) が双極 II 型障害で、平均罹病期間は 19 年であった。

高セルフスティグマ群と低セルフスティグマ群の比較では、高セルフスティグマ群は JSSMIS の合計スコアおよび ISMI-10 の合計スコアにおいて有意に高いスコアを示した (JSSMIS: $p < .0001$, ISMI-10: $p < .0001$)。一方で、スティグマ抵抗スコアは、高セルフスティグマ群で有意に低かった ($p < .0001$)。さらに、高セルフスティグマ群では、経済的支援 (生活保護、障害年金) の利用率が有意に高かった ($p = 0.001$)。

年齢、初診時年齢、スティグマ抵抗スコア、親への病名開示、配偶者への病名開示、生活保護・障害年金の受給の有無を説明変数として用い、多変量ロジスティック回帰分析を行った。高セルフスティグマ群は、低いスティグマ抵抗性と関連があり (OR=0.007, 95%CI=0.0008–0.07)、生活保護または障害年金の受給とも関連があることが示された

(OR=3.04, 95%CI=1.20-7.67)。

考察

本研究では、セルフスティグマの高さと経済的支援の利用との間に正の相関が認められ、他国での研究結果とは逆の傾向となった。この違いは、日本の文化的特徴に起因すると考えた。日本には、集団からの逸脱が「恥」とみなされる集団主義文化の特性があり、生活保護や障害年金受給時に受給者が羞恥心や嫌悪感を抱く傾向にあるとされる。日本では経済的支援を受けることが社会からの逸脱を意味し、セルフスティグマを悪化させる可能性がある。日本の双極性障害患者が経済的支援を利用するとき、疾患による苦痛に加え、社会からの逸脱者とされるという二重の苦痛に直面していると言える。

また、本研究では社会的スティグマへの抵抗が強いほどセルフスティグマが軽減されることも示された。セルフスティグマは、QOL、自尊心、自己価値に悪影響を及ぼすことが先行研究で示されており、本研究の結果もこれを支持するものである。

結論

本研究結果から、セルフスティグマの強さは経済的支援の利用およびスティグマ抵抗と関連することが示された。双極性障害患者が生活保護や障害年金を受給することは、疾患の苦痛に加え、患者が自身を社会的弱者と捉えてしまうという苦悩に繋がる可能性がある。このことから、医療従事者は経済的支援について患者に提案する際、患者の感情に配慮し、心理状態に合わせた説明が不可欠であるといえる。